[第１２回日本言語文化学研究会発表要旨]

対話的問題提起学習による異文化理解

池田玲子

（１９９６・６・２９発表）

１．はじめに

日本語教育において文化面の扱い方には、まだ明確な位置づけがなされていない。しかし、日本で生活する日本語学習者にとって、特にこの問題はことばの学習と大きく関わる重要な部分と考えられる。そこで、異文化共生のための相互理解型異文化教育に焦点をあてた学習方法の一つである対話的問題提起学習（岡崎・西川　1993）を表現領域の学習に取り入れることを試みた。以下はその実践報告と考察である。

２．対話的問題提起学習

この学習法の理論はブラジルの成人識字教育者であるFreireの「対話による教育」からのものである。これをＥＳＬに応用したものにWallerstein (1983)の問題提起学習（Problem-posing）がある。この学習の目的は、

（１）対話を通して目標言語を学ぶと共に、母語話者（教師・援助者）と学習者双方が共感的態度で各々のもつ問題を共同で考える。

（２）対話を重ねる中で、人間的なつながりを作っていく。相手文化の内在的視点を形成していく。

というものである。

日本語教育への応用例としては、岡崎・西川(1993）の対話的問題提起学習があり、今回の実践報告はこの学習方法を日本語学校の中級クラスの表現学習活動に応用したものである。

３．表現学習への応用

学習の目的は、

（１）学習者同士や学習者と教師とが目標言語の対話を通して異文化を相互理解する。

（２）他者との対話活動の中で考えたことを文章に書く。

とした。活動時間は、９０分授業で３回のシリーズとした。

１時間目

①質問紙に答える（カルチャーアシミレーター）

②自分の考えを口頭で発表

③意見交換

④教師からの問題提起

⑤似たような体験を書く

２時間目

①前回の質問「あなたならどうしますか」の回答を発表

②「似たような体験」に書かれた小作文をもとに学習者からの問題提起

③対話活動（対話のステップに沿って）

④対話後の考察を書く（または、口頭で）

３時間目

対話のときにうまく言えなかった表現についての練習

作文のフィードバックと書き直し

４．実践の具体例　（韓国人学習者Ａの場合）

約５００時間の学習を終えた日本語学習者、中国人４名と韓国人２名のクラス。対話的問題学習に参加した韓国人の女性Ａは、来日以来、異文化コンフリクトが原因と考えられる情緒不安定な時期が、４回自覚されたということだった。（インタビューより明らかになった）この学習の時期は、４回めの時期にあたっていた。思い悩んでいたことの原因は、日本人との人間関係によるものだった。日本人に対する不信感から、日本語学習にも意欲を失いつつあったため、授業にも欠席が目立つようになってしまったということだった。

教師の問題提起文について対話活動を行なった後、学習者Ａに「似たような体験」をクラス全体に問題提起させた。Ａの作文に書かれた内容は、学習者Ａの知人（韓国人）と、ある日本人との付き合いの中で起きたトラブルだった。対話活動に入り、他の学習者たちからの質問に対し、学習者Ａは知人の代弁者となり、自己の考えを話す中で、それまで自分では見い出せなかった新しい方向性への気付きを見せた。対話後のインタビューでは、今、自分が、この知人の韓国人と似たような立場に立たされていて、かなり悩んでいることや、来日以来、生活の中で起きた出来事など多くを教師に語った。

5．考察　（異文化理解の観点から）

学習者Aの場合、自分が特殊な考え方を持っているのではないことを強調し、日本人のことばに込められる意味が自分たち外国人にとって理解し難いと主張していた。そして、これは自分にとって不可解な相手文化のなすところであり、接点は見い出せないものと考えた。Bennet（1986）の異文化適応の発達モデル、Denial⇒Defence⇒Minimization⇒Acceptance⇒Adaptation⇒Integration　のうち、まだ2段階目のdefenceのステージにあるといえる。自分の文化と違えば違うほど、相手文化の評価は否定的になる特徴が見られるという段階である。学習者Aがこの活動を通して、異文化相互理解の目指す自己拡大としての変容を実現したことは明確に断定はできないかもしれない。しかし、対話のプロセスを通して、相互理解に向かう新たな方向を自分自身で見い出すことができた点や、対話後のインタビューで、授業以前に比べて自己開示がかなりなされている点は、異文化コンフリクトに対する今後の対処の仕方に何らかのプラス影響を与える可能性につながるのではないかと考えられる

6．まとめ

これまでの対話的問題提起学習の実践から、この学習方法が学習者にとって、自己拡大を目指す異文化理解のための可能性をもっていること、また、教師にとっても学習者との協力的問題解決の機会を提供できるということがいえるのではないか。しかし、この学習方法がそれぞれの学習者の異文化適応段階にどのような影響を及ぼすのかについては、まだ、明らかにできるだけの事例がなく、分析方法についてもまだ問題点が多い。今後はさらに多くの事例を加え、より妥当な分析に基づいた可能性を見い出したいと考える。

【主な参考文献】

岡崎敏雄・西川寿美 (1993)「学習者とのやりとりを通じた教師の成長」
『日本語学』Vol. 12

P．フレイレ『伝達か対話か』　訳　里見実・楠原彰・桧垣良子

N. Wallerstein (1983) Language and Culure in Conflict

M. J. Bennett (1986) "Towards Ethnorelativism：A Developmental Model of Intercultural Sensivity" Cross -Cultural Orientation

（お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士1年）